

真 生

第七卷 第七號



□近頃思想國難を叫ぶものが出て來たが、未だ之を如何に指導すべきかを云ふものがない。たまたま、之を宗教に待つべしと云ふものもあるが、其の宗教とは如何なる意味の宗教であらうか。

□此の意味に於て、若し眞に思想國難を叫び、宗教信仰の必要を論じやうとするならば、先づ以て私達は其の思想國難とは如何なる思想國難であるのか、そして又、之を指導すべき宗教がいかなる宗教であるべきかを明にすべきである。

□然に若し此の事を明にせずして、徒に思想國難を叫び、單に宗教の必要をのみ叫ぶと云ふことは、それはたゞ國民の思想を混亂し、併せて舊來の封建的思想の宗教を復起せしめ、反て社會の進展を妨ぐることとなる。

□茲に於て、私共はいかなる思想、いかなる宗教が眞に現代に適し、又將來に適せるかの研究をすべきである。

□若しさうでないならば今後の社會は各自の利己心に動かされて、目前の利益に走る思想と宗教に引づられ、さなくば横暴極まる資本主義一派の宣傳に乗せられ、或は又危險極まる社會主義一派の宣傳に引づられるではないか。

□此の意味に於て、私達はよろしく、社會の思想と生活の内容とを研究して、常に宇宙全一の社會生活に立つべく、其の研究を爲すべきである。公私を一如として、國民全体の上に其の發達を計るべきである。(念)



明 いる 生 活

目 次

| | |
|--------|------|
| 明るい生活 | 尅 子 |
| 生活の反省 | 土屋観道 |
| 宗教と生活 | 土屋観道 |
| 禪勝房 | 中村神羽 |
| 吾朋便り | |
| 五月の出来事 | 土屋観道 |

▽私は子供を幼稚園へ連れて行つて感じました。子供同志はどんな醜い子供でも、又どんな穢い風裁の子供でも、何の隔てもなく仲よく話してゐます。

▽それが私達大人同志ではそうはゆかぬ、少し身成りが悪いとすぐ見下げる、又自分の方で氣臆れする。器量が少し良いと威張る、悪ると恥ぢるホンの表面的で交際つてゐます。

▽智慧のある筈の大人は、その智慧をつまらぬ方へ多く使つて、其人の財産だとか、地位だとか、肩書だとか斗り見たがつて、其人の本質、價値を深く味ふとしません。勿論地位も肩書も其人の價値ではあるが、衷心價値ではありません。

▽本當の人間としての重味を造ること、そして人間の根本價値を見てゆくこと、そこに本當に人間としての交際ひがあります。それが「信の世界」であり「愛の世界」であります。この一点から割り出されて來た人事、修養でない、總てが皮層的、糊塗的文化修道になつて了ひます。

▽だからもう一遍皆が幼稚園に這入る「人間」に還ることが必要であります。信仰も所定の「信仰」といふモノの上へ、屋上屋を架するのでなく、その「信仰」といふものを破壊して、信仰とは何ぞや——といふ始点から、もう一度建て直すことが必要であります。これは他人の事ではなくて、自分の事です。(尅)

□信仰がアルとはどういふのを云ふのでせう、信仰が無いとはどう云ふのを云ふのでせう
□信仰がアルと云ふて、何だか頭の中に「信念」の持ち合せがあると云ふのではなさそう
であります、そんな「信念」なんか有つても無くても良い、たゞ振舞て行くところが道に
合つて、一々が曇りのない活き／＼したものであれば、それが正しい「信念」といふもの
でせう信仰は信念の研究でなくて「尊い信念」とナルことだと思ひます。

□寫真と自己とは一つではあるが、寫真は生きてゐた過去の姿であり、生きてゐる今の自
己ではありません、信念の寫真をか、へて居らずに、活きてゐる信念とならねばなりません
□だから信仰とは眞に生き／＼として行くことと云ふことであります、活き／＼として行くに
は自分の底にごこか暗い處が、少しでもあれば決して生き／＼としては行けません、だか
らそう云ふ黒い汚点を残さぬといふことです黒い黒幕が無いと開放されて明るく、落付い
て物事をやつて行けます。信仰のアルと無いとは、たゞソレダケの事です。

□元來私達の眞底は明るいことを要求してゐます、明るくするが爲めに諸有る方法を構じ
てゐます、金を貯めるのも、家を新しくするのも、甘い物を喰ひたがるのも、女を更へた
がるのも、皆「明るみ」の要求です、然しそうしたものは表面的明る味、一時的明る味
に外ならぬことを知つて來ました、そして「信仰」を求めて來たのです。

□而し「佛」を知つても、佛と一時的妥協であつて心底から明るくなつて來ません、爰に
信仰に入つても最う一遍飛躍せねばなりません、それは相對的佛との關係でなくて、自己
の上に本當の「如來の明かる味」を體驗せねばなりません。これが信仰にナルといふこと
です。

□この信仰にナツタ時は、必ず自己を中心とし家庭を明るくし、社會を明るくしてゆかま
す、單なる個人の問題に停まりません。(尅子)

生活の反省

土屋 觀 道

一、
或る正月の夕、店の人たちが一日の休課を得て、朝からカルタ遊びに興じてゐた。そこには勝つものもあり負けるものもあつた、そして殆ど一人として人の顔に墨つけぬものもなく、又一人として自分の顔に墨つけぬ人もなかつた。

自分の顔につく墨のきまり悪いのと反對に、人の顔に墨つくる得意さどが反つて、人の心に勝ち負けを一層に興からせた。打ちつゞく正月の遊びに店員の心もくつろぎ、今日は別して一同は喜びの模様であつた、それに男女打まじつての多數の集りで彼れ是十人の集りであつた。

丁度その時、店の主人が奥から出て来て、ニコニコしながらそれを見てゐたが、何と思つたか「オイ、君達、こゝに二三百の金がある、之をかけてやらないか、墨のつけ合いよりも、その方が面白い。」

かう云つて、財布の中から、其の金を取り出し、之を店員の總てに分けてやつた。店員の喜びは云ふまでもなかつた。

○「サアコイ、之からおれが勝つてやる。」

▽「ナニクツ、負けるものか。」

□「君達こそとられるな。」

△「とられてたまるか。」

○「オレが勝つ。」

それから勝負が始まつた、かうした遊びにも幾分の上手下手はあらうが、何れ素手の集りのこと、て勝つたり負けたりの争いであつた。金までかけての勝負と來たのだから、店員のさわざと云つたらはてがない、全真劍の争いであつた。そこには勝つて喜ぶ人もあり、負けて悲しむ人もきつとあつた、それはとても墨のつけ合い位いの争ひではなかつた。

一同はその戦いに氣をとられて、時の過ぐるのも打忘れて、夜の更けてもう十二時となつた。恐らくこのなりにしておくならば一同は夜が ажけるのも知らぬかも知れぬ。

二、

丁度、その時奥から主人が再び出て來た。そしてまたニコニコとした顔つきで

「どうだい、面白いのか諸君！」

○「旦那、之ほど面白いことはありません。」

□「おかげでこんなに勝ちました。」

▽「僕もこんなに勝ちました。」

○「私はどうとまけました。」

得意な人もあるかと思へば中にはすつかり負けた上に、借りまでこしらへた人もあるらしい、色青ざ

めてくやしがつてている人もある、中に悲しみと怒りに満ちた人さへあつた。けれども、其の勝負を争ふ心のみは一つであつた。主人が云つた

「オイ皆のものその金を持つて来い、勝負はどうなつたか。」
根が店員のことである、主人の云ふまゝに其の金を出した。

△「旦那、こんなに勝ちました。」

主人「ヨシヨシ」

□「私もこれだけ勝ちました。」

主人「ヨシヨシ」

○「私はこれだけに負けました。」

主人「ヨシヨシ」

▽「私はすつかり。」

主人「ヨシヨシ、もうみんな出したか、これですべてか。」

一同「サヨウでございます。」

主人「ではもう之位にして、皆やすめ、また明日の仕事もある。あまり夜更しては身の爲めにもならぬぞ。」

主人は其の金を全部元の財布に收めて、ニコニコしながら、奥の方へはいらうとした。

△「旦那、その金は私共の下さつたのではありませんか。」

「くれてたまるものか、一時貸してやつたまでのことだ、速く寝ろよ、明日の仕事にさわつてはいけません。」

かう云い棄て、主人はそのまゝ、奥の方へと去つてしまつた。

△「なあんだ、これでは何にもならんでないか。」

□「丸で働きぢんではないか。」

▽「こんなことなら、やらぬが良かったです。」

でも、もうそれらのくどきは何の用もせなかつた。主人は居ないし、凡ての金はとりあげられて、皆は元の無一物となつた。

三、

之は一つの話に過ぎない。乍然諸君よ、世にはかうした人々が多いではないか。若し此の主人の心が初めから知れていたらどうであつたらう。それでも此等の店員は其の金で、無心に懸けごとをしたであらうか、そしてまた、これほどに熱心にカケをしたり、又負勝に全力を注いだであらうか。それは到底あり得ないことである。そしてまた、若し之を豫め他から知つたものがあつたとしたら、それらを知らないで、汗水ながして夜更けまで一生懸命になつてカケしてゐる、之等の店員がいかに馬鹿げて見えたであらう。而も其の勝負に於て、勝たことに於て喜ぶ人はまだよいとして、若しもそれによつて、負けたもの、悲しみとなり、失望となつて身の處置を失い、或はまたその爲めに争ひとなり、戦ひとなつて人を損ひ、自らを亡ぼし、夜の過ぐるも知らずして、一生を誤まるに至つては寧ろ人生の悲惨事でないか。而て、私は此の悲惨事を往々にして、此の人生の上に見ることのあるのを悲しまずにおられない。

世の多くの人々よ、諸君にして、此のカルタ遊びを絶対にしない人が幾人であらう。

金の爲めなら命も失い、名譽の爲めなら自分も忘れ、女の爲めなら妻子も知らぬ。之が多くの人々で

はないか。

若し、此の店員を我々として此の店の主人を死の神と假定せよ、此の人生の一生を眺めたとき、人の人生を十二時と眺めたとき、恐くは思ひ半に過ぎるものがあるではなからうか。死の神の前には今までの金も名譽も好きな女も悉く此の世において行かねばならぬ。此の死を知らぬ人生ほど哀はれなものはないではないか。

乍然、世間の多くはこのことを多くは知らないで遊んでゐる。従つて彼等は永生の光を見ず、價値の生活を知らずして、此の世を永劫のものとして誤つて、徒に金錢や名譽の奴隷となり、或は情慾に左右せられて此の現實に浮れてゐる、寧ろ悲哀の極みである。

四、

今私共の宗教はかうした人生のカルタ遊びを止めて、更に眞實の自己へと轉向するの運動である。限りなき永生の光と、限りなき向上の一路に向つて眞實の自己を發見し、身心共に價値の生活に生きるの道である。

然に多くの人々は未だ眞實の人生を知らず、ともすれば眞實の自己を知らないで、徒にカルタ遊びに一生を終らうとする。世に之ほど愚かなるものがあらうか。どんなに金を貯めたとして、死後にまで持つて行くことはできない。そして一切は其の人の死を限りとして、皆こゝに置いて行かねばならないではないか、うつかりすると此の世の主人は前の店の主人と異つて、片ばしかつら、私共をまつばだかにして、此の世から掴み出すのである。而も其の中の一人が自分であることを知つたなら、此のカルタ遊びは止むべきではないか。従つて今後の私達は今少しく眞實の人生を送るべく深く反省すべきであらう。

(三、六、二八、柏崎原様方二階にて)

宗教と生活

土屋 觀道

一、宗教とはどんなものか

一がいに宗教と申しましたが、どんなものが宗教であるかと之を學問的に考へますと可なりにもむづかしいものとなつて來るのであります。それは今日の多くの學者や博士たちが、どんなものを宗教といふかと云ふことを定めるのに未だ一定の標準さへないのを以つても明かであります。

乍然それでは宗教とはどんなものであるか全く判らないかと云ひますれば一般に之ほど明かなものはないのであります。而も宗教はいかなる元始の時代にも、又如何なる今日の民族にそれのない所はないと云います。而も簡單に神とか佛とか申しますれば今日の我國では誰一人知らぬものとは無いやうであります。それにもかゝらず、神とは何か佛とは何であるかと嚴密に其の内容を尋ねますれば同じ宗教の中にも其の信する人々の信仰内容は甚だまち／＼のものであります。殊に

野蠻人の宗教と文明人の宗教とは其の名に於て同じでありまして、其の内容に至つては甚だ相違するものが多いのであります。従つて此の点に於ては特に私共に於て其の異なるもの、あることを知つて置く必要があります。

乍然一般に宗教と云ふものが、一つの自分以上の絶大なる力の存在を信じ、其の力が私共の生命と生活との上に大きな一つの關係があると云ふ信仰に至つては一であります。而も其の力は一つの偉大なる力であつて、之を一つの偉靈と感じ、この偉靈は私共に向つて、一つの力となつて顯はれて來るものであつて、其の力に従へば榮え、之に反すれば亡ぶると云ふやうな感じを持つ点も亦大小淺深の相違こそあれ、そこには共通の一点があるやうであります。

二、宗教の生活と其の内容

私たちが此の世の中に生活する以上、自分と周

圍との關係に於て、若しくは自分自身の生活内容に於て、私共はそこに一つの人間以上の大きな力のあることを知ることができませう。その力は廣く天地一切の上に行はれ、其の間疑ふことのできない天地の法則が行はれていることを見るのであります。而も亦、此の法則の上に現はれてはいる天地の萬象が私共の生活の上に多くの欠くべからざるものとして、其の恵みを垂れているのであります。尤も、此の恵みは一見必ずしも恵みとのみは見ることのできないものもありますが、それは私共の考へ方により、努力によりまして、それからの影響を避け、或は之を積極的に利用することによつて、自分たちの生活の上に都合よく展開することも出来るのであります。そして、そこにまた私共の自由を認め、無限の望みと喜びもあり、努力もそこにあり得るのでありますが、それをどの範圍まで見うるかに就ては大いに考究を要するものがありませう。従て、此の間の考へが私共の生活の上にごう顯はれて來るかといふことによつて、其の生活が色々の色彩と變化を帯びて來るの

でありませう。而もこの人間以上の力、之を一つの絶對と見て、此の力に神とか佛とか云ふ擬人的考へを附して、私共が常にこの力に左右され、之にそむいては罰せられ、之に従つては恵ぐまれると見るのが一般多くの宗教であり信仰であります。之に反して、この力を一つの實在的のものとして非人格に見て自ら之に反せず之に融合して行かうとするのが一般佛教の出發であります。前者を有神論系と云ひ後者を無神論系と云ふのもそこにあります。而も有神論の中にもその神なるものを律法的な嚴格恐怖すべき神と見るか、それとも自律的な慈愛の神と見るかは其の民族により、又その見方によつて異なるのであります。而て無神論と云ふ佛教の中にも全く無神的にのみ眺めて宇宙と人生との關係を律法的自律主義に見るものもあり、又宇宙と人生とを全く有神論的慈悲の宗教として見るの教へもありませう。従て同じ宗教と申しまして、其の宗教の種々相に於て其の生活と内容が可なりに異つたもの、あることを知るべきであります。

三、私共の見たる宗教

然は私共の見たる宗教、言換れば私共の信する所の宗教はいかなる宗教であるかと申しますれば大無量壽經に顯はれてゐるやうな阿彌陀佛の信仰であります。尤も阿彌陀佛の信仰と申しまして大經の中に書かれてあるところのものが如何なるものであるかと云ふことは其の人の見るところによつて或は幾分相違するかも知れませぬ。否現に古來からの幾多の先覺者と云はれる人々の間にも已に異つた見方があるのを見ますれば其の何れの見方が眞實であるかは可なりに考察を要する点があります。而も中には其の大經の全体を釋尊滅後の後人の創作に過ぎぬと云ふ人もあり、一步譲つて、之を釋尊の眞說であるとしまして、それが果してどの点まで完全に傳へられているかを考へれば果しないことでもあります。そしてまた、それがどれだけ完全に翻譯せられたものかどうか、よし、それが完全に翻譯せられたものとしまして、其の見方の見方によつて色々と異つた意味に見られる場合、その何れによるべきかは更に一層の

嚴密な考察を要すべきものがあります。殊に言語學上幾多の言葉と云ふものは其の時代によつて變化して行く性質を以て居りますから、幾百年幾千年と歳を経た是等の經典を正しく理解して行くことは更に可なりに困難なことであります。而も亦言葉と云ふものが成る意味に於て、決して體驗そのものを充分に現はせぬ場合もあり、又體驗の世界はたとい體驗の人の言葉によつても、體驗なき人には通するものでない限り、自ら大經を知ると申しまして、其の中のどれだけが本當に判つたかは疑問であります。従て今私共がこゝに私共の宗教として、大無量壽經に顯はれている阿彌陀佛の信仰と申しまして、それで讀者に私共の信仰を判つて頂くことはちと困難なことかと思ひます。けれども右の意味に於て、今少しく私共の信仰内容を現代の言葉を以つて言い現はそうとしますれば寧ろ宇宙の生命と私共の關係とでも申しませうか、私達は宇宙と人生との間に於て、宇宙を人格的生命の本源と見て、其の中に人生の最高理想を實現して行かうとするの信仰であります。

四、宇宙と人生

而も、宇宙と人生に於て、私達は宇宙の宏大無邊なることを信せずには居られません。而もそれが空間的にも時間的にも共に宏大にして無邊であります。宇宙の大きさがどれ位でありませうか、又宇宙の始りがいつからであり、宇宙の終りがいつ迄でありませうか、それは殆ど宇宙の大きさと永さに於て想像を絶するものであります。

而も宇宙と云へば一切を包括していません、あらゆる万物も皆この中にあり、宇宙を離れて一切の万物はないのであります。而も万物は宇宙に於て一体であります、宇宙の外に万物無く、万物の外に又宇宙はありません、万物即宇宙、宇宙即万物であります。万物と宇宙とは全く不二一体のものであります。

而も、宇宙は一体にして、万物は常に相関し、時間的にも空間的にも常に動いて止まぬものであります。死と云ふ名が動かぬものであり、動くものが生であるならば宇宙は正に常に動いて止まぬもの、即ち宇宙は一の活物であります。宜なる哉

生活をつくるのであります。

五、宗教と生活

而も、私達の理想はそればかりで止まるものではありません。そこには一切を宇宙の大生命に任かして、其中に自己の天分を養い、各自の本分を自覺して、自らの理想を此の上に實現しやうとするのであります。此の心を佛教では佛性と申します。而して此の自覺が自らの上に立ち、又一切の上に之を立たしめやうとすることが即ち佛陀の事業であり佛陀の佛陀たる所以であります。言換れば宇宙の本源たる如來を中心として、一切を如來

凡そ一切の宇宙に於けるありとあらゆるもの、一として此の宇宙より生ぜざるものとはないのであります。靜に觀すれば凡そ宇宙の万有皆この宇宙現象の一差別相に過ぎないものでありまして、言換れば一切の万有はたゞこれ宇宙そのもの、進展して止まざる行相の象に過ぎぬのであります。即ちあらゆる宇宙万象の起滅變化は宇宙そのもの、一大變化に外ならぬものであります。此の意味に於て、宇宙は一大生命であり、万象の變化は其生命の發展の相に過ぎません。

而も、其の宇宙の發展の力の如何に偉大なることよ、そこには一切の万物を産みなして、万法の親となり、而も整然たる天地の法則はそのま、宇宙法則の力であります。而て、此の宇宙の力によつて万物は生長し發展し、進歩して行くのであつて、此の力なくしては一切の万物は悉く育つことはできぬのであります。之を天地の心と云い、佛の心とも申します。

此の意味に於て私達の生活は宇宙の生命を我身に受け其の中に於て、宇宙の力と法則と恵みとのに任せ、如來の限りなき慈光の中に、此の上もない安住を得ると共に、其の中から最善の努力を以つて、限りなき人類の理想を此の上に實現すべく立つのであります。

從て私共の宗教生活には一面如來の大慈に一切を任せて其の慈光の中に絶対の慰安を得ると共に又一面には其絶対の慰安の中から常に自分自身の各自の立場から、其爲すべき道に常に精進して止まない活動の方面があるのであります。(三、六二八、柏崎原様方にて)

禪 勝 房 (上)

中 村 神 羽

◆ 吾朋便り

▼大垣市 桑原省三様より

お葉書賜り拜誦仕候處今回には神谷様、古賀様御隨行之由皆々様日夜賑々敷御法悦の事と御羨敷奉存候就而唐澤山觀月堂借用之件に付照會いたし候處、別紙の通り回答有之候間何とが人員を制限すより外に無之候間御地方にて

「武邊者よ、した、か者よ。」
「法師らしかぬ法師よ。」

黒谷へ入室してのちも其心ばへ猛げく惡を憎むこゝろ強くて、よく人をなぐつたり縛つたりして、常に師の坊の心を痛めて居つ

めと泣いた事から、眞如堂の本尊に上品上生の願かけした事なども話した。

有下朋自遠方來亦樂乎

今の熊谷入道に取つては親族の訪れよりも、親しかつた戦友の平山津戸なんどの尋ねて呉れるのよりも、求道の友が一入うれしいのであつた。

「私には先程から承つた如來様の事がはつきりわからないのです。凡夫が唯だ念佛して助けらるゝならば、それは凡聖同居の淨土であり、藏教所談の劣應身の様に思はれます。随つて少し斗り天台學をかちつた者から眺めると化身であり化土である様にしか考へられませんか。夫れは差別三界同時融即の上から云へば同じ事かも知れませんが、理窟の上では如何様ともあれ、事實上の淨土は所居の人の修因に依つた感果ですから、三界見思の惑を斷じ塵砂の煩惱を斷じ盡くしても尙ほ根本無明の殘存に藏通別圓四教の聖人達が浮身をやつして居られたと承ります。夫れを煩惱具縛の凡夫が實報無障の土に往生するなんてとても信せられない事で御座います。」

「私なぞにはそんな學問の事などさつぱりわかりませんが、唯だ自分の恐しい罪に目ざめて信仰に専心したのだから、今あなたの御話になつた事は珍紛漢紛です。がいくら無學な私にだつて

▼大阪 野田三郎様より

愈青葉繁き夏となりました、先生には彼方此方まで道友の爲、眞實の道を御説き下され、寧日無く御奔走の御事と御察し申し上げます。

大阪の道友も少人数乍ら絶えず精進を續けて居ります、中々希望通には行きませんが、少しも失望も落膽も致しません。只私共として爲すべき事を爲したれば幸ひであるさま常に念願する許りです。

▼静岡市 藤井貞邦様より

拜啓過日は失禮仕りました。東京へ御歸りごのみ思つて居りまして焼津行を御送りせず狐につまされた案配で御座いました。法月君曰く「いよくかすみを食ふてある人間になつたかなあ」と、小生を仙人と仇名する人間が二三人御座います。さて大寶曼荼羅書留小包にて御送り申上げました、どうぞ御署名を御忘れなく願上します。直す所が御座いましたら今度こそ切り抜いて貼紙で訂正致します。以前のよりも太字に對し振假名も大きく致しました。御子様にはハシカであらせられたとか何卒大切になさいます様祈り上げます。

▼津島町 中野善英様より

先日當地へ御越下さる事と思つて公會堂で御

話を願ひたく借入方を交渉して今尙借りてありますので、今度もし御都合がつきましたら一夜御立寄の上公會堂で座談會が御願出來ぬかと思ひ鍵清呉服店主人にも談合の上御願に及んだので御座います。若し御都合が付きまして其の上その日が公會堂が空いて居ましたら御願ひいたし度、御日取がつきましたら至急御一報願上度御願み申上げます。

五月の出來ごと

土屋 親道

多少理窟は云へます、夫があなたの御考へに合ふかどうかはわからないが、私の信仰からの考へを申して見ますと、今の凡聖同居などと云ふ事はあなたの宗旨の上から、理窟に合はせたもので、本當の如來様には無關係な學問沙汰です。あなた方の宗旨や華嚴宗や三論法相なりの宗旨とこの念佛の法門とは建前が違ふから、今迄の先入觀念を忘れさなければ恐らく念佛の味ひは御わかりにならないでせう。私達念佛行者は念佛する事に依つて、唯だ如來様を信じ信じ抜く丈なのです。地獄一定の私が念佛して助かると教へられたのを一途に進むともう如來様の事が忘れられないのです。如來様が劣つて居るの、勝ぐれて居るのと誰れがそんな事を云ひ初めたのか知りませんが、如來様にまさり劣りがあらふ筈がないではありませんか、少數の劣らう人を救ふのは勝れた如來で多數のわからずやを救ふのは劣つた如來様だなんて、丸で考へがあべこべですよ、私達は如來様にそんな區別があらふとは思ひません。凡夫も聖人も皆一樣にあみだはどけに助けられまいるのです、一心に南無する所に如來様の大願業力が冥合して下さるのです、本當に有難い事です。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「さその御念佛の事です。私には全くわからないので、不審の一つ二つを是非御教へを願ひたいと存じます。まづ最初に御訪

□子供の病氣 四月の旅を終つて、二十六日に歸京しますと、長女の美智子が風邪の氣味で床にいました。たいした機嫌もありませんでした。二十七日頃になると、どうやらハシカのやうだとのこと、二十八日は愈々それだときまりました。お醫者の話では多分次の風子にも感染してゐるでせうとのこと、若しさうなるご父この二月に生れた光道の身も案ぜられ、五月の傳道も出れないことになるがご氣づかれました、丁度越後の原様の奥様が居て看病を手傳つて頂きましたが、家内が光道をつれて二階に避難しているため、長子までがハシカさなつてはさても私が居なくて

びでした。子供たちが大きくなりまして此の御恩に感ずる日がいつ来るかと思ふとき、此度の病氣が又一しほ之等の深き因縁を結んでくれたかのやうな喜びさへ感じます。

□浦賀行き 五月の二十三日の頃、子供の病氣も愈全快しましたので、其の健康の爲めにもと思つて、二人をつれて浦賀の伊藤様へまいりました。かねてから度々お使ひを受けていたからでもあり、又私も行きたかつたからであります。行きに浦賀の上坂様と藤井様を御訪れし、色々お世話話になり、伊藤様には丁度六日間許りを暮しました。毎日毎日

ハチキレさうになつてゐるイチゴを食後に三人で頂きました、子供の喜ぶこと、いつたそれこそ限らない喜びでした。それに海岸に近いので盪風にさらされ氣候も寒暑知らずでありました。美智子は四つの歳私と一度三日許り泊りがけに來たことがありましたが、良子は母と離れて旅することは今度が初めてです。それに今はもう五つになつたの姉の美智子と一緒になので少しも歸りたいとも云はな

いのです、それには伊藤のおばさまやイチゴが大歓迎をしてくれたからのことも大ありでせう。

□それにつけても、子供の丈夫でかうして遊ぶのを見るご親の喜びは又格別であります。永島のカバサンや長安寺、正業寺の方々にも一方ならぬ御世話になり、又浦賀の道友の御訪れに任つたことも又限らない喜びでした。そして又光道の身は其後も無事、ハンカもさうくうづらにすみましたことは何よりの喜びでした。(三、六、二六、越後南鱒石佐藤氏方ニテ)

定價 一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

唐澤別時三味會案内

一、日時 八月二日ヨリ八日まで七日間

一、場所 長野縣上諏訪町 唐澤山 阿彌陀寺

一前日午後五時頃までに上諏訪驛前の旅館に待合せます。

今年も一層眞劍に修養致しませう

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷人 百々 治之助

名古屋市東區關鍛冶町四ノ八

印刷所 横井印刷所

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日)

昭和三年七月十日印刷納本
昭和三年七月十二日發行

第三種郵便物認可 (毎月一回十二日發行) 第七卷 第六號